徳島市埋蔵文化財調査報告書第16集

阿波国府跡第５次調査概報

―― １９８６年度 ――

1987

徳島市教育委員会

徳島市埋蔵文化財調査報告書第16集

阿波国府跡第５次調査概報

―― １９８６年度 ――

1987

徳島市教育委員会

序

阿波国府は，奈良時代の中央集権化の中で，地方行政官庁として造営されたものです。

阿波国府は，徳島市国府町府中の大御和神社を中心に展開したといわれますが，長い歴史の経過の中で幾多の変遷を繰り返し，威容を誇ったと思われる奈良・平安時代の府域や政庁の建物は地下深く眠ってしまったようです。

昭和57年度より６ケ年計画の予定で，国庫補助を受けて，県下でも最大級の重要遺跡である阿波国府跡の府域及び政庁の規模・構造などの確認調査を実施しております。

本遺跡の調査によって，該期の歴史的環境の復元あるいは文化と技術の伝播状態を把握する上において貴重な資料が提供されるものと思われます。

最後に，調査にあたりまして，ご指導・ご助言をいただきました水野正好・田中　琢両先生をはじめ，地元の研究者の方々とともに，地元及び地権者の方々の真摯なご助力に対して深く感謝いたします。

昭和62年３月31日

徳島市教育委員会

教育長　久　木　吉　春

例　　言

1　本書は，国庫補助を受けて，徳島市国府町観音寺字こうげ535の周辺を中心に実施した「阿波国府跡」の重要遺跡確認調査（第５次調査）の概要報告である。

2　発掘調査は，徳島市教育委員会が主体となり，「阿波国府跡発掘調査団」を編成して，昭和62年３月２日から３月末日まで実施し，事務処理については徳島市教育委員会社会教育課が担当した。

3　検出遺構の実測図については，調査員・調査補助員が分担した。遺物整理については，調査員・調査補助員の協力を得て実施し，遺構・遺物の写真・実測及び製図については，一山　典 が担当した。

4　本書の執筆・編集は，一山　典 が担当した。

目　　次

序

第 1 章　位置と歴史的環境 …… 1

第 2 章　調査に至る経過 …… 5

第 3 章　調査成果の概要

Ⅰ 検 出 遺 構 …… 8

Ⅱ 出 土 遺 物 …… 14

第 4 章　小　　結 …… 18

挿　図　目　次

第１図　阿波国府跡と周辺の遺跡 …… 2
第２図　阿波国府跡調査地点周辺地形図 …… 7
第３図　ＧⅠ－４・ＧⅢ－２地区グリッド配置図 …… 9
第４図　ＧⅠ－４・ＧⅢ－２地区検出遺構配置図 …… 10
第５図　ＧⅢ－４地区グリッド配置図 …… 11
第６図　ＧⅢ－４地区検出遺構配置図 …… 12
第７図　ＨⅠ地区グリッド配置図 …… 13
第８図　ＨⅠ地区検出遺構配置図 …… 13
第９図　出土土師器・須恵器・陶磁器・土錘実測図 …… 15
第10図　出土砥石実測図 …… 16
第10図　出土軒平瓦・丸瓦・平瓦拓影・実測図 …… 17

図　版　目　次

図版１　阿波国府跡調査地点　航空写真
図版２　ＧⅢ－２地区ＳＤ－14溝　南より
　　ＧⅢ－２地区ＳＤ－14溝遺物出土状態
図版３　ＧⅢ－２地区検出遺構　西より
　　ＧⅢ－２地区ピット軒平瓦出土状態
図版４　ＧⅢ－４地区検出遺構　西より
　　ＧⅢ－４地区ＳＫ－27遺物出土状態
図版５　ＧⅢ－４地区検出遺構　北より
　　ＨⅠ地区検出遺構
図版６　出土土師器・須恵器
図版７　出土土錘
　　出土砥石
図版８　出土軒平瓦・平瓦

第１章　位置と歴史的環境

吉野川の支流である鮎喰川によって形成された沖積平野の末端付近に位置する徳島市国府町（左岸）と名東町を中心とする一帯（右岸）は，縄文時代～古墳時代の遺跡から奈良・平安時代の寺院跡・瓦窯跡などの多数の遺跡が存在し，阿波の原始・古代の中心地であった。

代表的なものを列挙すれば，鮎喰川左岸の矢野遺跡，南内遺跡，奥谷１・２号墳，宮谷古墳，矢野古墳，阿波国分寺跡，阿波国分尼寺跡，（名西郡石井町）など，鮎喰川右岸の名東遺跡，鮎喰遺跡，庄遺跡，南庄遺跡，節句山１・２号墳，八人塚古墳，穴不動古墳などの集落跡，銅鐸・銅剣出土地，古墳群，寺院跡などの重要な遺跡が存在し，一部に条里の残存も認められる。

これらの遺跡の一つと，鮎喰川左岸の徳島市国府町府中字田渕の大御和神社周辺の沖積低地上に，「阿波国府跡」が展開したといわれるが，さらに西方に位置していた可能性を有していた。

阿波国府の歴史的背景を考える上からも，鮎喰川左岸を中心とした沖積平野及び周辺丘陵の主要遺跡の概要について概略的にみておきたい。

縄文時代には，鮎喰川右岸の南佐古浄水場遺跡（三谷遺跡）から縄文時代後期の土器片，庄町１丁目の庄遺跡―日赤血液センター地区，南蔵本町３丁目の庄遺跡―南佐古・鮎喰線地区―，南庄町●丁目の南庄遺跡―南庄・南佐古線地区，名東町１丁目の名東遺跡などから縄文時代晩期の土器片が検出されている程度であり，鮎喰川左岸においては，現状では該時代の明瞭な遺構・遺物は発見されていない。

弥生時代には，この沖積平野にも遺跡が展開し，国府町の矢野遺跡（中・後期中心），名東町の名東遺跡（前期～後期），南庄町の南庄遺跡（前期～後期），庄町の庄遺跡（前期～後期），鮎喰町の鮎喰（鮎喰南）遺跡（前期～後期）などの大集落が形成される。

弥生時代中期以降の重要な遺跡として，農耕祭祀との関連が強いといわれる銅鐸・銅剣出土地があり，該地域周辺では国府町の源田遺跡があげられる。

古墳時代には，鮎喰川下流域の平野部の遺跡は，前述の矢野遺跡・名東遺跡・阿波国分寺跡の下層の南内遺跡などから該時代の遺構・遺物が検出されている程度であり，鮎喰遺跡からは古墳時代前期の竪穴住居跡なども検出されているが集落跡については今後の調査の進展が俟たれる。

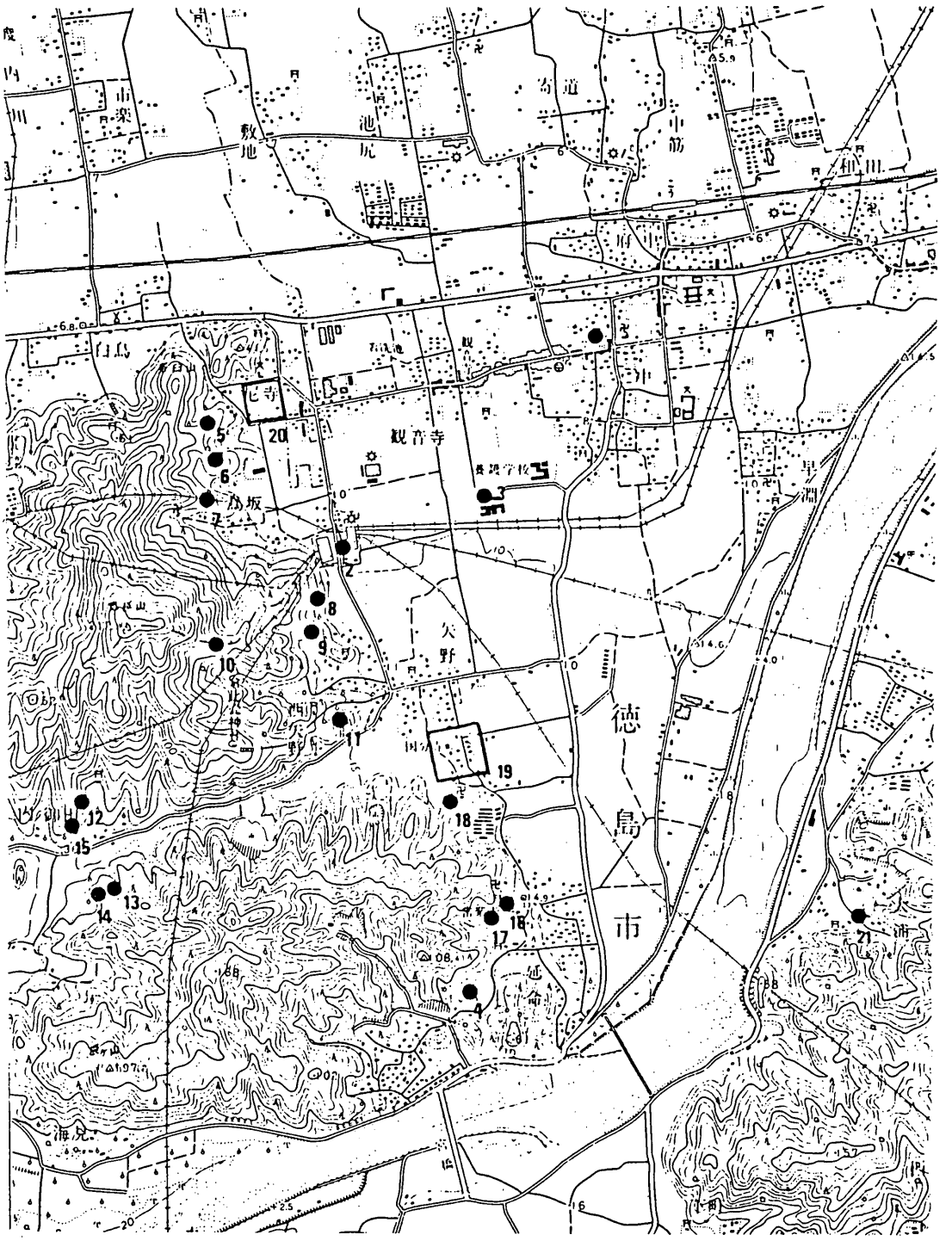
一方，古墳については，平野部に続く丘陵一帯に多数築造されているが，沖積平野上に立地する古墳は現状では皆無となっている。

鮎喰川左岸では，国府町西矢野に奥谷１・２号墳，宮谷古墳などの前方後円墳・前方後方墳が気延山古墳群の一角に築造されている。

鮎喰川下流域における丘陵には多数の後期古墳が存在するが，発掘調査等がなされ，その規模・構造・内容・様相・性格等が判明しているのは数例であり，いずれも内部主体は横穴式石室である。

鮎喰川下流域の周辺丘陵で確認されている後期古墳は気延山東麓と眉山北西麓を中心に展開し，それぞれ，気延山古墳群，名東山古墳群と呼称されている。前者では県指定史跡の矢野古墳，後者では穴不動古墳が代表的なものである。

矢野古墳は気延山東麓の丘陵端付近に位置し，平野部との比高差は約10mとなっている。直径約15mの円墳で，内部主体は左・右ともに約30cmの袖を有する横穴式石室であり，南側に開口部を設



第１図 阿波国府跡と周辺の遺跡

けている。玄室長3.3m，玄室幅2.4m，玄室高2.5m，玄門長0.3m，玄門幅1.9m，玄門高1.9m，羨道長3.9mを測り，６世紀末～７世紀初頭の年代が比定されている。(1)

歴史時代に入ると，鮎喰川下流域の左岸一帯を中心に，阿波国分寺跡，阿波国分尼寺跡，阿波国府跡などが展開する。

阿波国分寺跡は大御和神社の南南西約1.5kmの四国霊場第15番札所の現国分寺を中心に展開したといわれ，海抜11m前後に立地している。昭和53年度からの３次にわたる発掘調査等により，寺域の東・西・南・北限の一部確認，中心伽藍の一部などが検出されている。出土遺物としては，土師器・須恵器・黒色土器・瓦質土器・陶磁器片などとともに土馬などがあげられる。瓦塼類としては軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・熨斗瓦・隅切瓦・丸瓦・平瓦・塼・壁塼などが発見されている。(2)

阿波国分尼寺跡は大御和神社の西方約1.2kmに位置し，海抜10m前後に立地している。昭和45・46年度の発掘調査により，金堂・北門・築地・溝等の遺構が検出されている。寺域は158m天平尺１町半）四方で，伽藍中軸線は真北から西へ約11度ふれ，条里地割とほぼ一致していることが確認されている。金堂跡は東西（桁行）約28m，南北（梁行）約18mで長さ約３m，幅約50cmの凝灰岩の敷石や地覆石の地盤などが検出されている。出土遺物としては，土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・瓦質土器・緑釉陶器・青磁・白磁等の土製品類とともに，少量の鉄製品等の金属製品類，軒丸瓦・軒平瓦・鬼瓦・丸瓦・平瓦・塼等の瓦塼類などが検出されている。(3)

阿波国分跡は海抜７m前後の沖積低地上に立地する「大御和神社」を中心に展開したといわれ，従来より歴史地理学的研究を中心に成果が発表され，府域の規模・位置推定などがなされている。明治41年発刊の『徳島縣名勝案内』に「國司廳址」として紹介されたのをはじめ，阿波国府跡の位置推定等が中井伊与太・小川国太郎・秋山　泰・藤岡謙二郎・三好昭一郎・美馬弥蔵氏等により発表されている。(4) 福井好行氏は阿波国府跡推定地と周辺部の条里の研究及び地名からの研究，木下　良氏は国府と条里に関する米倉説の再検討による阿波国府跡ほかの位置推定等の研究，(5) 米倉二郎氏は国府の等級の昇格により国府の規模も変容したという研究成果を発表された。(6) これらの研究成果等をふまえ，阿波国府跡の重要性が指摘され，昭和57年度より重要遺跡確認調査が実施されている。(7) 検出遺構としては，掘立柱建物・柱列・溝・土坑（土坑墓）・井戸・石組遺構などが存在する。出土遺物としては，土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・土錘・陶硯・坩堝等の土製品類，石鍋・石硯・砥石等の石製品類，鉄製品・古銭等の金属製品類，丸瓦・平瓦等の瓦塼類などがあげられる。(8)

以上のほかにも，観音寺跡・西蓮寺跡・常楽寺跡などの寺院跡とともに，瓦谷瓦窯跡・常楽寺瓦窯跡・国分寺瓦窯跡（平窯跡）などの瓦窯跡の存在も知られている。(9)

また，鮎喰川右岸の名東町３丁目に所在する大浦遺跡からは，密教法具等の独鈷杵・三鈷杵・錫杖等の土製鋳型が検出されており，全国的にも注目されている。(10)

註

(1) 天羽利夫「終末期の古墳二基―穴不動古墳・矢野の横穴式古墳―」『徳島県博物館報』No14 1972. 3

(2) 徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第１次調査概報―1978年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第４集　1979．３
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第２次調査概報―1979年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第７集　1980．３
徳島市教育委員会「阿波国分寺跡第３次調査概報―1980年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第９集　1981．３
(3) 徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分尼寺跡緊急発掘調査概報』1971．３　徳島県教育委員会・石井町教育委員会『阿波国分尼寺遺跡（第２次）緊急掘調査概報』1972．３
(4) 石毛賢之助「國司廳址」『阿波名勝案内』1980．２
(5) 「国府庁址」『徳島懸史磧名勝天然記念物調査報告』第一輯　1929．３
中井伊与太「阿波国府址」「徳島毎日新聞」新年号　1938．１
小川国太郎「国司庁とその遺跡」『名東郡史』1960．11
秋山　泰「国司の庁」『徳島県史』第１巻　1964．３
藤岡謙二郎「四国の国府」『国府』1969．12
三好昭一郎「律令国家の成立と徳島地方」『徳島市史』第一巻　総説編　1972．10
美馬弥蔵「阿波の国府址について」『ふるさと阿波』83　1975．６
(6) 福井好行「阿波の国府と其附近の条里」『徳島大学学芸学部紀要』社会科学９　1959．９
福井好行「阿讃地名考　序説」『阿波の歴史地理』第三　1972．２
(7) 木下　良「国府と条里との関係について」『史林』50巻５号　1967．９
(8) 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」『史林』66巻１号　1983．１
(9) 徳島市教育委員会「阿波国府跡第１次調査概報―1982年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第12集　1983．３
徳島市教育委員会「阿波国府跡第２次調査概報―1983年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第13集　1984．３
徳島市教育委員会「阿波国府跡第３次調査概報―1984年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第14集　1985．３
徳島市教育委員会「阿波国府跡第４次調査概報―1985年度―」『徳島市埋蔵文化財調査報告書』第15集　1986．３
(10) 徳島市教育委員会『阿波を掘る―最近の発掘調査―』1986．11

第２章　調査に至る経過

阿波国府跡については，前述のごとく，従来より多くの研究成果が発表されているが，主として歴史地理学分野での位置及び規模等の推定を中心としており，徳島市国府町府中字田渕に所在する大御和神社を中心に展開したといわれている。

これらの研究成果と昭和56年度の国府中学校建替工事に伴う事前の緊急調査及び分布調査の成果等より，「阿波国府跡」の重要性が再認識され，昭和57年度より６ケ年計画の予定で「重要遺跡確認調査」として，国庫補助を受けて実施している。

第１次調査（昭和57年度）では，大御和神社境内（Ａ地区）を４地区に分け，ＡⅡ・ＡⅣ地区を中心に約300㎡を調査対象面積とした。検出遺構としては，堀立柱建物２棟・溝４条・柱列２・上坑14・井戸１・石組遺構１などがあり，出土遺物としては，土製品類―土師器・須恵器・瓦器・陶磁器・土錘・陶硯など，石製品類―石鍋・石硯など，金属製品類―鉄製品・寛永通寶など，瓦塼類―丸瓦・平瓦などがあり，平安時代後期以降に比定されるものが大部分である。

第２次調査（昭和58年度）では，大御和神社の東側（ＢⅠ・ＢⅡ地区）と北西側（ＣⅠ地区）の約300㎡を調査対象とした。検出遺構としては，掘立柱建物１棟・溝３条・柱列１・土坑（土坑墓含む）４などがあり，出土遺物としては，土製品類―土師器・須恵器・陶磁器・土錘など，石製品類―石鍋・砥石など，金属製品類―鉄小刀・古銭など，瓦塼類―丸瓦・平瓦などがあり，平安時代後期以降に比定されるものが大部分である。

第３次調査（昭和59年度）では，大御和神社の西方約180ｍの地点のＤ地区において，約500㎡を調査対象とした。検出遺構としては，溝６条・土坑墓１・土坑３とともに大小のピットがあり，出土遺物としては，土製品類―土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・磁器・土錘・鞴羽口など，金属製品類―鉄斧・鉄刀子・古銭など，瓦塼類―丸瓦・平瓦などがあり，奈良時代前期～中世に比定される。

第４次調査（昭和60年度）では，大御和神社の北方約200ｍの地点（Ｅ地区），南西約300ｍの地点（Ｆ地区）の約500㎡を調査した。検出遺構としては，土坑・水田遺構及び大小のピットがあげられる。出土遺物としては，土製品類・石製品類・金属製品類とともに瓦塼類などがあげられる。土製品類としては，土師器・須恵器・瓦器・陶器・磁器・土錘などが存在し，陶磁器以外は器種・出土点数は極少である。石製品数としては，石臼が出土している程度である。金属製品類としては，鉄釘・楔などの鉄製品と古銭などが検出されている程度である。瓦塼類としては，平瓦の破片が若干数検出されている。

本年度（昭和61年度）の調査は，昨年度の調査に関連して，大御和神社の西方約800ｍ前後の地点で調査を実施することになりました。調査に先立ち，「阿波国府跡発掘調査団」を編成して，昭和62年３月２日～３月末日まで調査を実施した。

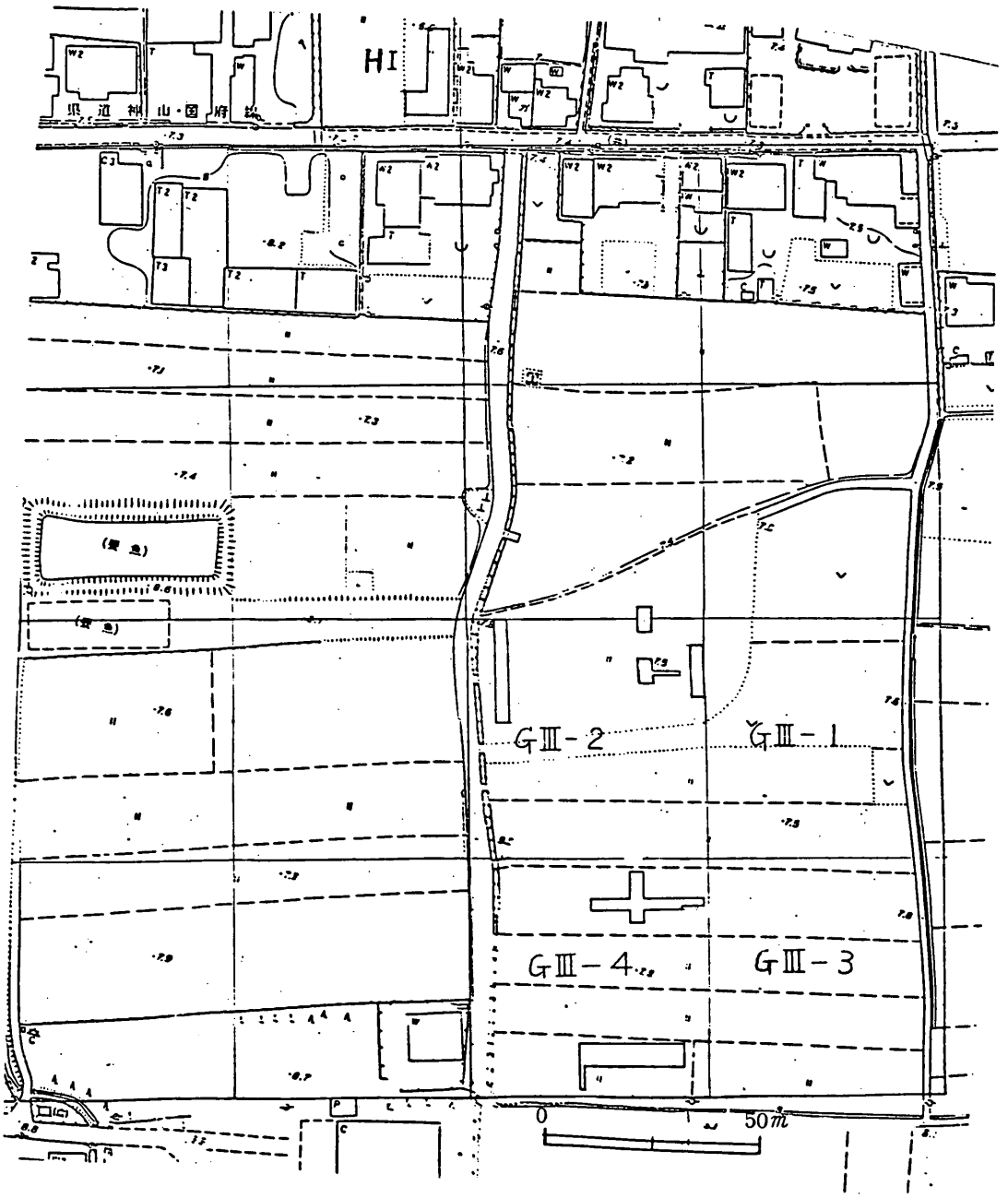
阿波国府跡調査団構成メンバー

顧　　問　　沖野舜二　（徳島県文化財保護審議会会長）
　　田中良平　（徳島市文化財保議審議会委員長）

	秋山　泰	（徳島県文化財保護審議会委員）
	伊丹　功	（徳島市文化財保護審議会委員）
	岩崎正夫	（徳島市文化財保護審議会委員）
	藤井哲四郎	（徳島市文化財保護審議会委員）
	桝田　務	（徳島県教育委員会文化課長）
調査指導	水野正好	（奈良大学文学部教授）
	田中　琢	（奈良国立文化財埋蔵文化財センター長）
調査団長	久木吉春	（徳島市教育委員会教育長）
調査副団長	峯川好仁	（徳島市教育委員会社会教育課長）
指導・助言	天羽利夫・小林勝美・中田　正・松永住美	
調査主任	一山　典	（徳島市教育委員会社会教育課主事）
調査員	黒田　卓	（大阪学院大学ＯＢ）
	地上　仁	（奈良大学ＯＢ）
調査補助員	藍谷博臣・岩佐忠典・浦川浩紀・貝出六一	
	黒田義隆・幸田雅明・坂本将之・佐々木　望	
	佐藤一二・滝口義則・冨尾吉彦・友竹訓司	
	早渕春夫・町　政春・向井　徹・盛　喜八	
	森本　孝・矢野直樹・山口慎次・山口　昇	
	山口良一・板橋トシ子・犬伏艶子・川上アケミ	
	小原佐和子・沢口繁子・澤口淑子・杉本タミノ	
	武知敏子・東條清子・松島冨美子・身野ミヤ子	
	美馬邦子・岩野五十鈴・矢本アサ子・幸田笑子	
地元協力者	阿部定一・谷　博吉・坪井一仁・坂東　諱	
事務局		
局長	柳澤茂美	（徳島市教育委員会社会教育課主査兼文化振興係長）
次長	大津　衛	（徳島市教育委員会社会教育課主幹兼指導係長）
局員	横谷千代美	（徳島市教育委員会社会教育課主事）
	武市明子	（徳島市教育委員会社会教育課課員）

（順不同・敬称略）

調査にあたりましては，奈良大学の水野正好先生，奈良国立文化財研究所の田中　琢先生をはじめ地元の研究者の方々にも種々の御指導・御助言をいただきました。記して感謝の意を表する次第です。また，土地所有者の坪井一仁氏にはプレハブ仮設用地の提供をいただきました。なお，いちいち御芳名をあげられませんでしたが，多くの方々の御援助・御協力をいただきました。併せて感謝の意を表する次第です。



第２図 阿波国府跡調査地点周辺地形図

第３章　調査成果の概要

本年度の調査（第５次調査）は，昨年度の調査成果等をふまえて，大御和神社の南西約800ｍのＧ地区と西方約800ｍのＨⅠ地区で実施した。調査対象面積はＧ地区は375㎡，ＨⅠ地区は125㎡である。

Ｇ地区はこうげの地名を有する２町四方の範囲を四等分し，それぞれＧⅠ・ＧⅡ・ＧⅢ・ＧⅣ地区と呼称し，さらにこれを四等分し，ＧⅢ－１・２・３・４区と呼称した。ＧⅢ－１地区は西よりＡ～Ｑ，南より１～18とし，ＧⅢ－２地区は東よりＡ～Ｑ，南より１～18とし，ＧⅢ－３地区は西よりＡ～Ｑ，北より１～18とし，ＧⅢ－４地区は東よりＡ～Ｑ，北より１～18とし，それぞれＡ１，Ａ２グリッド（３ｍ×３ｍ）と呼称した。

ＨⅠ地区は東よりＡ～Ｄ，南より１～８とし，それぞれＢ２・Ｂ３グリッド（５ｍ×５ｍ）と呼称した。

Ⅰ　検　出　遺　構

今回の調査により検出された遺構は，掘立柱建物１棟・溝12条・土坑５などとともに大小のピットがあげられる。

Ｇ　Ⅰ　－　４　地　区

ＧⅠ－４地区は，ＧⅢ－２地区の調査に関連して，一部を拡張調査（Ｅ18グリッド）したのみである。

ＧⅢ－２地区のＥ18グリッドから続く土坑の北半部とピットが検出されている程度である。

Ｇ　Ⅲ　－　２　地　区

溝６条と土坑２などとともに大小のピットが検出され，一部は建物の一部を構成していた可能性を有する。

溝

ＳＤ－14は，調査区の西端南側のＤ11・Ｄ12グリッドにかけて検出された東西溝である。幅約70cm前後，深さ約30cmで約３ｍ分が検出され，東・西側にさらに延びる可能性を有している。土師器などが出土している。

ＳＤ－15は，調査区の中央部北東よりのＢ14～Ｅ14グリッドにかけて検出された東西溝である。幅約70cm前後，深さ約15cmで約６ｍ分が検出され，ＳＤ－16によって削平されている。土師器片などが出土している。

ＳＤ－16は，ＳＤ－15と交差する東西溝であり，幅約50cm，深さ10～20cmを測る。若干の土師器片などが出土している。

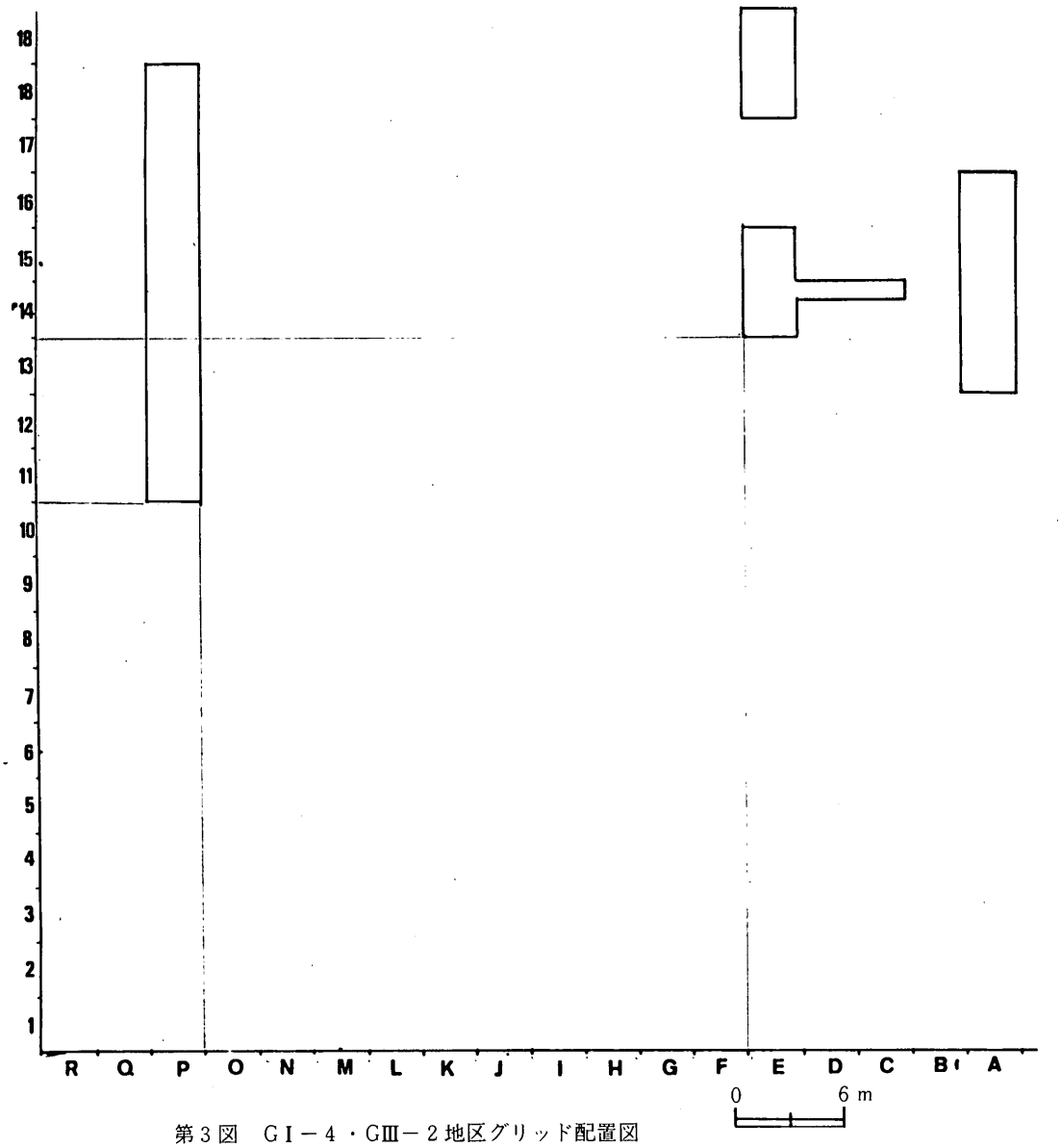
ＳＤ－17は，ＳＤ－15と並行して走る東西溝であり，幅約50cm，深さ約10cmを測る。

土　　坑

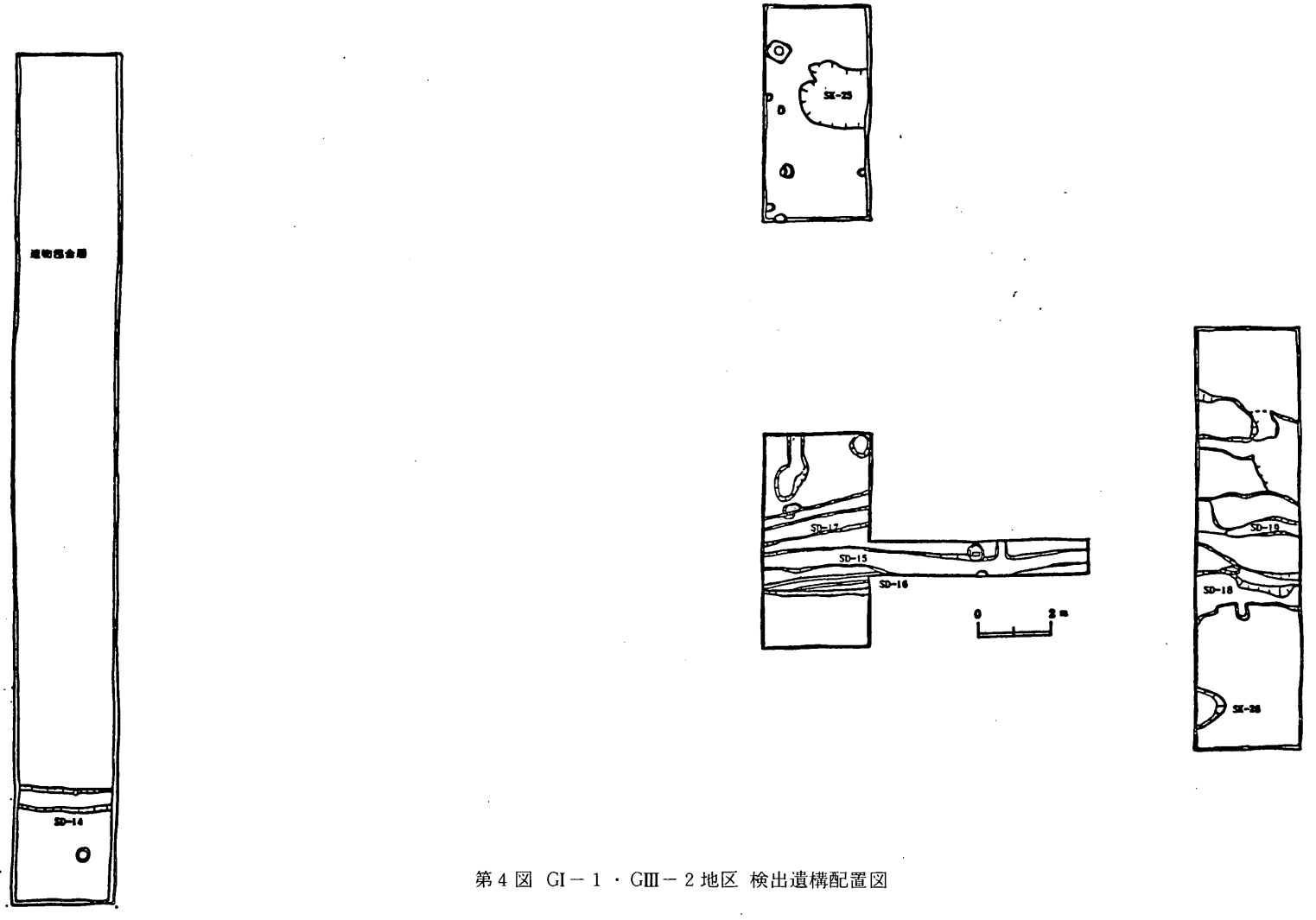
ＳＫ—25は，ＧⅢ—２地区の北端やや東よりのＥ18グリッドとＧＩ—１地区のＥ18グリッドにかけて検出された不整楕円形プランを呈する土坑であり，若干の土師器片が出土している。

ＳＫ—26は，調査区の東端中央部やや北よりのＡＢグリッドに検出された楕円形状プランを呈する土坑で東半部のみが検出され，土師器片などが出土している。

その他には，ＳＤ—14の北側のＤ—12～18グリッドにかけては，土師器・須恵器・丸瓦・平瓦片が多量に出土した遺物包含層が認められ，諸般の事情により深く掘り下げることができなかったので詳細は不明であるが，遺構の存在が考えられ，今後の調査成果が俟たれる。



第３図　ＧＩ－４・GⅢ－２地区グリッド配置図



第４図 GⅠ－１・GⅢ－２地区 検出遺構配置図

Ｇ Ⅲ － ４ 地 区

掘立柱建物１棟・溝６条・土坑３などとともに大小のピットが検出されている。

掘立柱建物

ＳＢ―04は，調査区の中央部北よりのＨ４・Ｉ４グリッドにかけて検出され，大部分が南側の未調査区に続くものと思われ，詳細は不明である。柱穴は直径20～30cm，深さ約20～30cmで，底に礎石状の石を有するものとともに，根固め石と思われるものも認められる。

溝

ＳＤ―18は，Ｈ４グリッドに検出された南北溝である。幅約40cm，深さ約30cmを測り，土師器・須恵器片などが出土している。

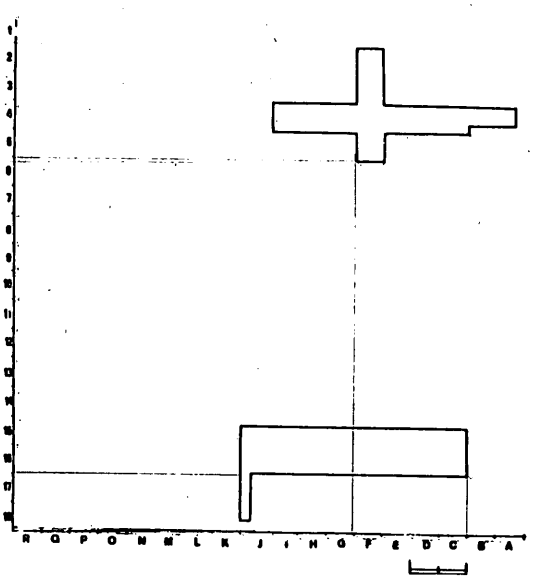
ＳＤ―19は，Ｅ４・Ｆ４・Ｆ５グリッドにかけて検出された南北溝である。幅約80cm，深さ約40cmを測り，土師器・須恵器片などとともに平面片も出土している。

ＳＤ―20は，調査区の南端中央部のＪ17―18グリッドにかけて検出された東西溝であり，幅約80cm深さ約35cm前後を測り，土師器片などが出土している。

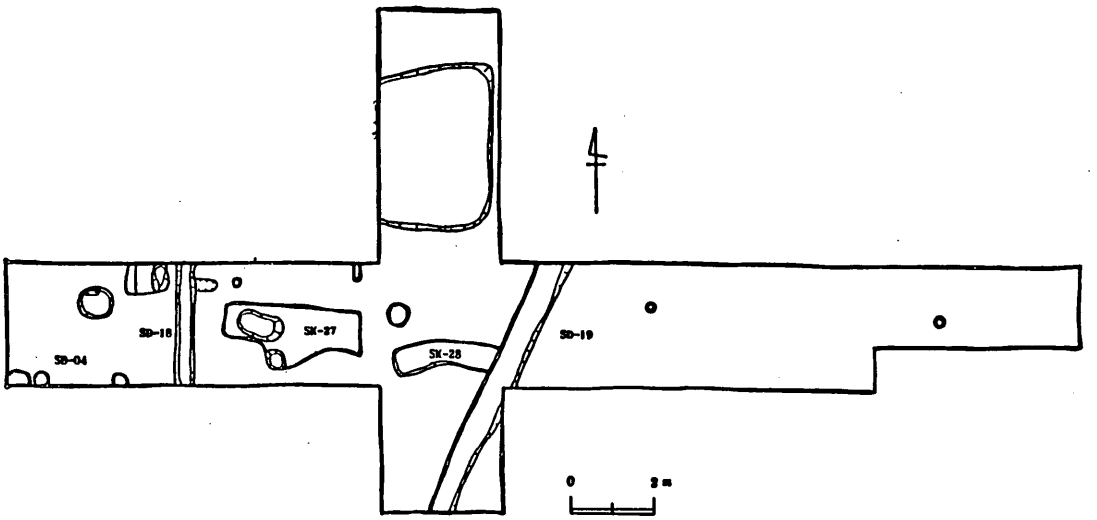
土　　坑

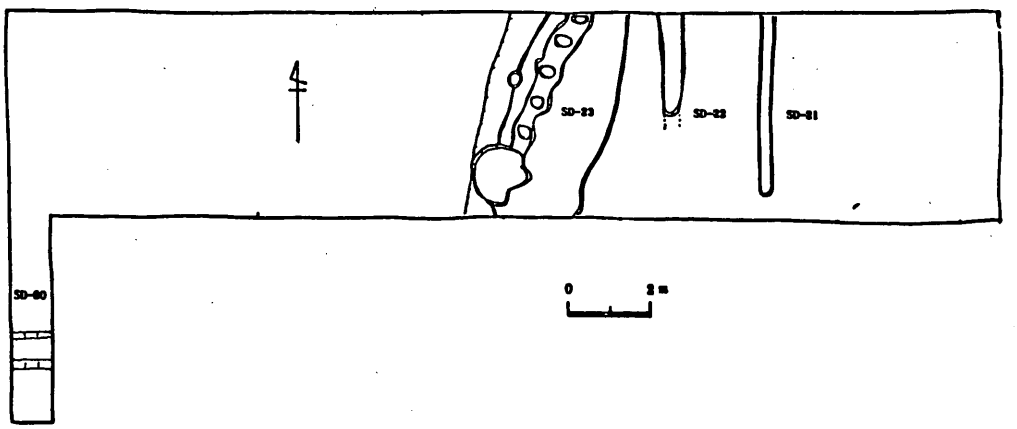
ＳＫ―27は，不整形プランを呈する土坑であり，最大長約3.3m，最大幅約1.4m，深さ５～30cmを測る。土師器・須恵器片が出土している。

ＳＫ―28は，不整長楕円形プランを呈する土坑であり，ＳＤ―19により東端部を削平されている。現存長約2.3m，幅約60cm，深さ約10cmを測り，土師器片が出土している。



第５図　GⅢ－４地区グリッド配置図

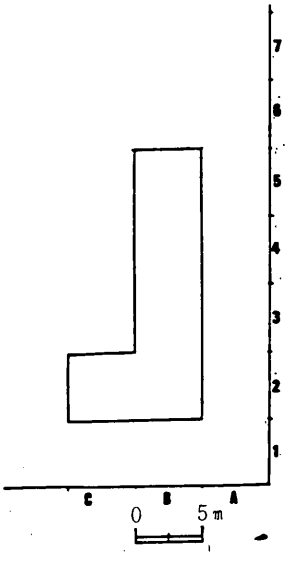




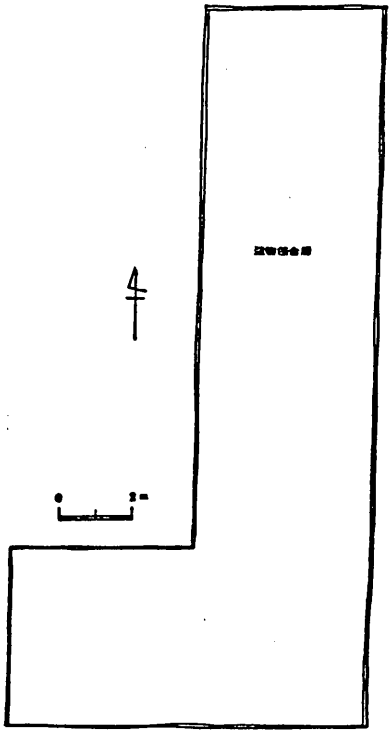
第６図 GⅢ－４地区 検出遺構配置図

Ｈ Ｉ 地 区

本地区からは，明瞭な遺構の検出はなかったが，表土下約60cm以下に遺物包含層が認められ，土師器・須恵器片とともに，丸瓦・平瓦片が出土している。



第７図　ＨＩ地区グリッド配置図



第８図　ＨＩ地区検出遺構配置図

Ⅱ 出 土 遺 物

今回の発掘調査により検出された出土遺物としては，土製品類・石製品類・瓦塼類とともに若干の金属製品類（鉄塊）などがあげられる。

(1) 土 製 品 類

土製品類としては，土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・磁器・土錘などとともに若干の陶器小破片が存在する。

土　師　器

土師器はＧⅢ－２・４地区を中心に調査区全体より検出されており，出土遺物の整理が完了していないので詳細は不明であるが，供膳形態の坏・皿の二器種を中心に若干の高坏・埦などとともに，煮沸形態・調理形態の甕などが若干数認められる。

坏については，丸底のもの（Ａ類）と平底のもの（Ｂ類）と高台を貼り付けるもの（Ｃ類）とに大別される。

皿については，平底で高台が付かないもの（Ａ類），高台を貼り付けるもの（Ｂ類）とに大別される。

埦については，出土点数は極少で大部が小破片であるが，丸底のもの（Ａ類）と高台を貼り付けるもの（Ｂ類）とに大別されるものと思われる。

須　恵　器

須恵器も量的には少ないが，調査区全体から検出されている。器種としては，坏・埦・蓋坏・壺・甕などが存在する。

坏には，丸底と思われるもの（Ａ類）と平底のもの（Ｂ類）とが存在する。

壺には，短頸壺と長頸壺とが存在する。

黒 色 土 器

出土点数は少ないが，高台を貼り付けた埦と思われるものの底部が１点のみ検出されている。

瓦　　器

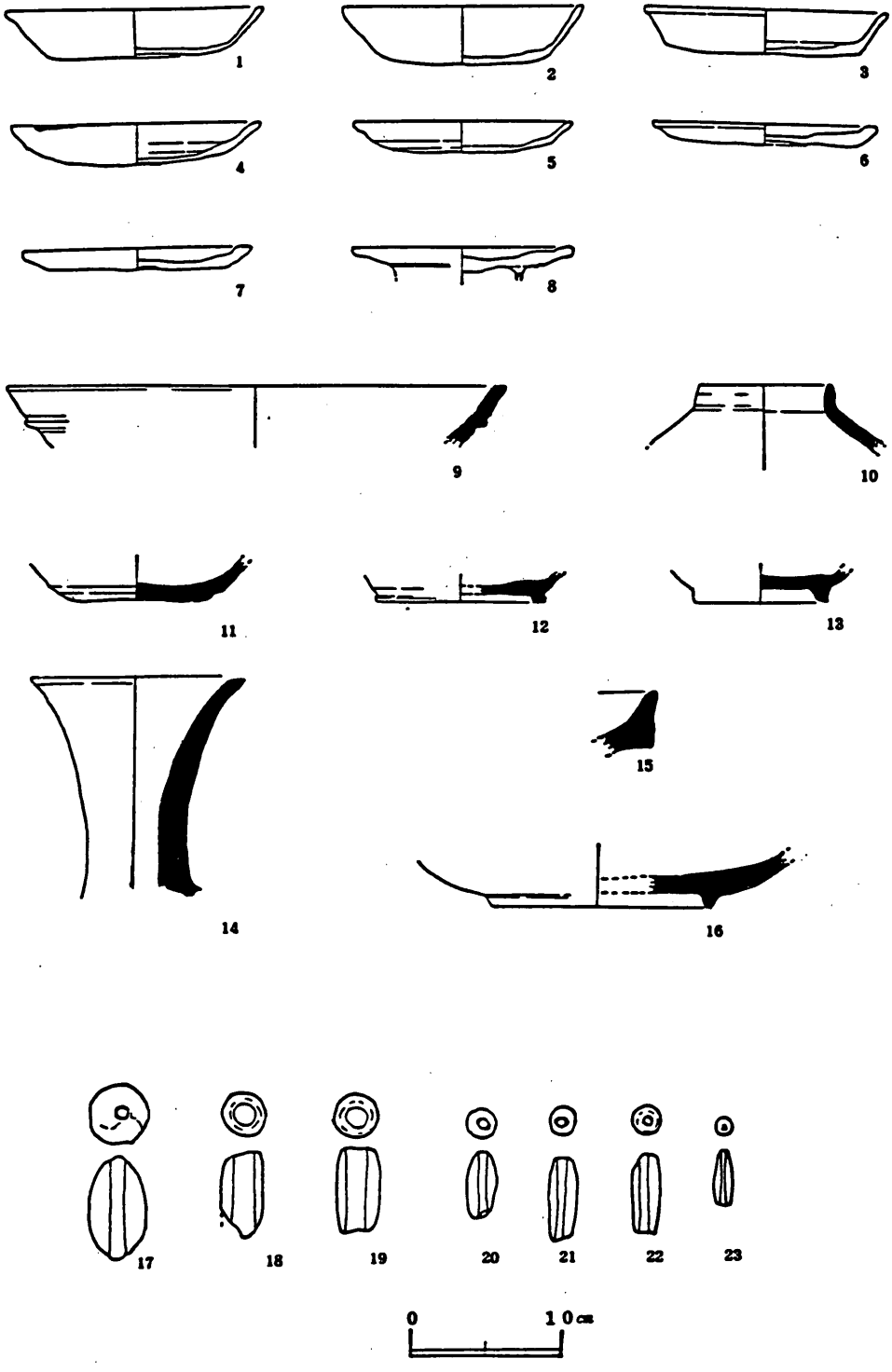
大部分が小破片であり，全体の形状を復元するのは困難なものが多いが，若干数の埦（高台付含む）と思われるものの底部が検出されている。

陶　磁　器

国産の陶磁器と中国産と思われる青磁小破片が検出されている程度である。

土　　錘

10点のみの出土であり，いずれも管状土錘である。大・中・小の三つに大別される。



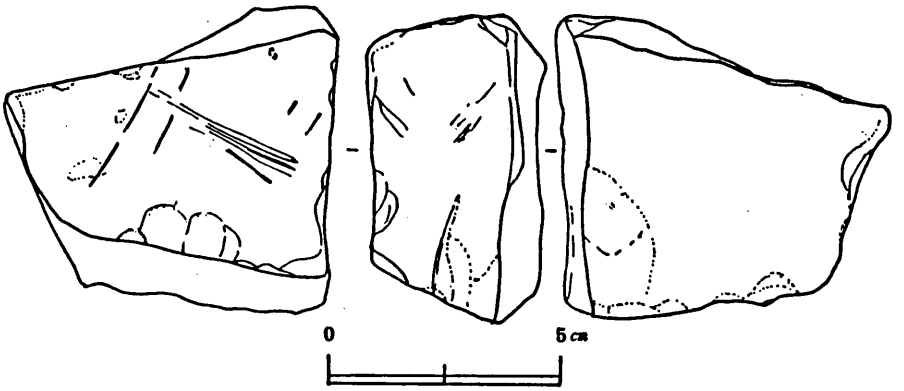
第９図　出土土師器・須恵器・陶磁器・土錘実測図

(2) 石 製 品 類

石製品類としては，砥石１点のみの出土である。

砥　　石

ＧⅢ－４地区のＧ16グリッドの第２層から検出されたもので，最大厚約3.6cmを測り，表裏及び両側面などに研磨痕が認められる。



第10図　出土砥石実測図

(3) 瓦 塼 類

瓦塼類としては，重郭文軒平瓦と丸瓦・平瓦の小破片が若干数検出されている。

軒 平 瓦

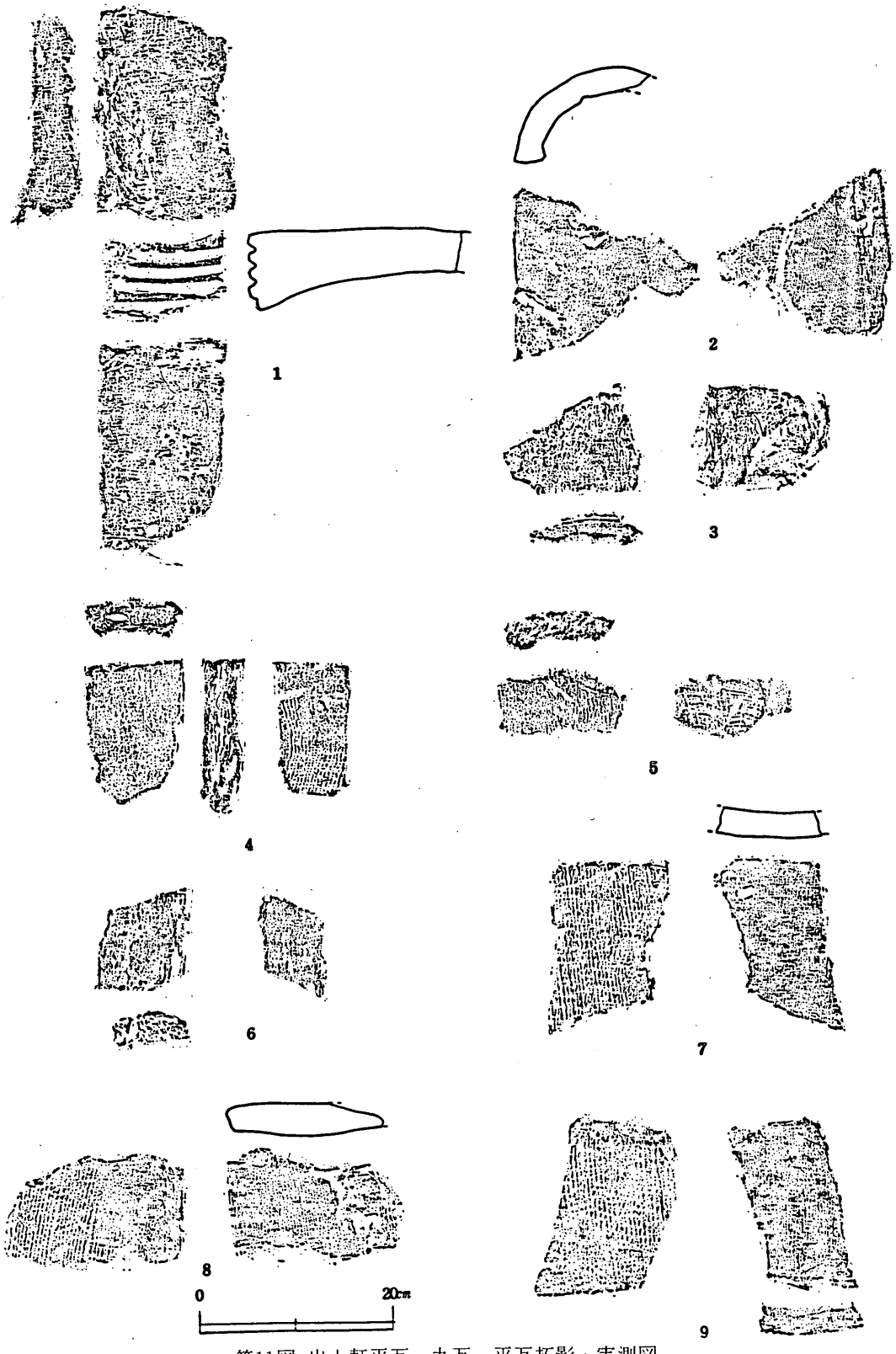
重郭文軒平瓦は，ＧⅢ－２地区のＤ14グリッドのピットより１点のみ検出されたもので，瓦当部約３分の１の破片であり，現存長約19cmを測り，瓦当面の厚さ5.7cmで蹄顎式となっている。凸面は縦方向のヘラ削りの調整がなされ，一部に縄叩目文と思われるものが残っている。凹面は瓦当面より約３cmは縦方向，約11cmは横方向のヘラ削りが施され，その他は粗雑な布目痕を有している。

丸　　瓦

凸面が無文のもの（Ａ類）と縄叩目文を配したもの（Ｂ類）が存在する。前者は凹面の布目痕は比較的細かく，後者はやや荒くなっている。小破片が大部分で数点のみの出土である。

平　　瓦

小破片が大部分で，全体の形状を知るものは検出されていないが，いずれも，凸面に縄叩目文を配し，凹面には布目痕を有している。縄叩目文には精・粗があり，それと同様に布目痕にも精・粗が存在する。



第11図 出土軒平瓦・丸瓦・平瓦拓影・実測図

第４章　小　　結

今回の調査目的は，阿波国府跡の政庁に関する遺構の検出であり，従来より西政方跡と推定されている大御和神社周辺部の調査成果をふまえて，大御和神社の西方約800m前後の地点で調査を実施した。ここでは，今回の発掘調査の成果等に関連した問題点をあげて，小結としたい。なお，国府・国衙・政庁等の概念については，山中敏史氏の指摘に従っておきたい。(1)

①　検出遺構及び出土遺物に関する諸問題

検出遺構としては，前述のごとく，掘立柱建物・溝・土坑などとともに大小のピットがあげられる。

掘立柱建物については，部分的な検出のため，阿波国府跡に関連する遺構とは特定できなかった。出土遺物からして，平安時代後期以降に比定されるものと思われる。

溝については，建物に付随する可能性を有するＳＤ―15・ＳＤ―18なども存在し，いずれも平安時代後期以降に比定されるものと思われる。

土坑については，土師器の坏・皿などが検出されたＳＫ―27・ＳＫ―28などが存在し，いずれも平安時代後期以降に比定されるものと思われる。

なお，ＧⅢ―４地区のＩ４グリッドから検出された大形ピットからは，土師器・須恵器片が出土しており，平安時代前期に比定される。

出土遺物としては，前述のごとく，土製品類―土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・陶器・磁器・土錘など，石製品類―砥石，金属製品類―鉄塊，瓦塼類―重郭文軒平瓦・丸瓦・平瓦などがあげられる。土師器の坏・皿以外は破片が大部分である。

土師器については，坏Ａを中心に，若干数の坏Ｂ・皿Ａ・皿Ｂ・高坏・甕などが存在する。大部分が平安時代後期以降に比定される。

須恵器については，坏Ａ・坏Ｂ・椀Ａなどの器種を中心に，若干数の壺・甕・蓋坏の破片が存在する。年代的には，大部分が陶邑編のⅣ・Ⅴ型式に属し，年代的には平安時代後期以降に比定されるものと思われる。(2)

黒色土器については小破片のため詳細は不明であるが，年代的には平安時代後期に比定されるものと思われる。(3)

瓦器については，白石編年のⅢ―１型式の時期（13世紀前葉～中葉）に比定される椀が検出されている程度である。(4)

陶磁器については，国産の陶磁器類の小破片が若干数検出されている程度であり，年代的には室町時代以降に比定される。(5)

軒平瓦は，平城宮跡6574Ａ型式の系統に属する重郭文軒平瓦であり，周辺部の阿波国分寺跡・阿波国分尼寺跡出土の重郭文軒平瓦との比較検討が必要不可欠である。(6)

丸瓦・平瓦については，前述したごとく小破片が大部分であり，詳細は不明である。平瓦については，凸面の縄叩目文の精・粗により若干の時期差が存在するものと思われる。年代的には，奈良～平安時代の所産と思われる。

② 位置及び府域に関する諸問題

阿波国府跡については，従来の歴史地理学的研究の成果より，大御和神社が西政庁跡，道路をはさんで東側の千輻寺（大坊）が東政庁跡と考えられてきた。また，前述したごとく，米倉二郎氏によれば，初期の阿波国府の政庁―条里地割に一致する―が大御和神社境内を中心とし，後期の阿波国府の政庁―正方位地割に一致する―が国鉄徳島本線府中駅の西方約200m（大御和神社の北方約250m）の地点とされ，初期（中国の時代）は六町四方，後期（上国の時代）は八町四方になったことが指摘されている。(7)

大御和神社周辺部の調査においては，阿波国府跡に関連すると思われる遺構には明確に奈良時代まで遡るものは存在しなかった。面積的に非常に狭い範囲の調査であるため再検討の余地を有しているが，第1～4次調査及び今回の調査とともに周辺部の緊急調査・分布調査等の成果を考慮してみると，ある時期の阿波国府の政庁が大御和神社よりさらに西方に位置していた可能性も有し，今後の研究課題である。

今回の調査により検出された遺構・遺物については，明確に阿波国府の政方などに関連するものと特定できなかったが，特に今回の調査地点は「こうげ（かうげ）」の小字名を有し，従来の分布調査においても奈良～平安時代の土師器・須恵器片が周辺部からも多量に採集されるとともに，均整唐草文軒平瓦片等も検出されている。これらの点を考慮すると，該地域に阿波国府の国衙等がある時期に営造されていた可能性も有しており，今後の調査成果が俟たれる。

註

(1) 山中敏史「国府・郡衙跡調査研究の歴史」『仏教芸術』124　1979．5

(2) 山中敏史「八・九世紀における中央官衙と土師器」『考古学研究』第19巻第4号　1973．4
小笠原好彦「近畿地方の七・八世紀の土師器とその流通」『考古学研究』第27巻第2号　1980．9
巽淳一郎「古代窯業生産の展開―西日本を中心にして」『文化財論叢』1983．3

(3) 田辺昭三編『陶邑古窯址群Ⅰ』1966．4
中村浩ほか「陶邑Ⅰ」『大阪府文化財調査報告書』第28輯　1976．3

(4) 小笠原好彦「丹塗土師器と黒色土師器」『考古学研究』第18巻第2号　1971．9

(5) 白石太一郎「いわゆる瓦器に関する二・三の問題―古代末～中世初頭における土器の生産と流通に関する一考察―」『古代学研究』54　1969．4
白石太一郎「越智氏居館出土の瓦器―瓦器の終末年代に関連して―」『古代学研究』85　1977．12
川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二・三の問題」『文化財論叢』1983．3

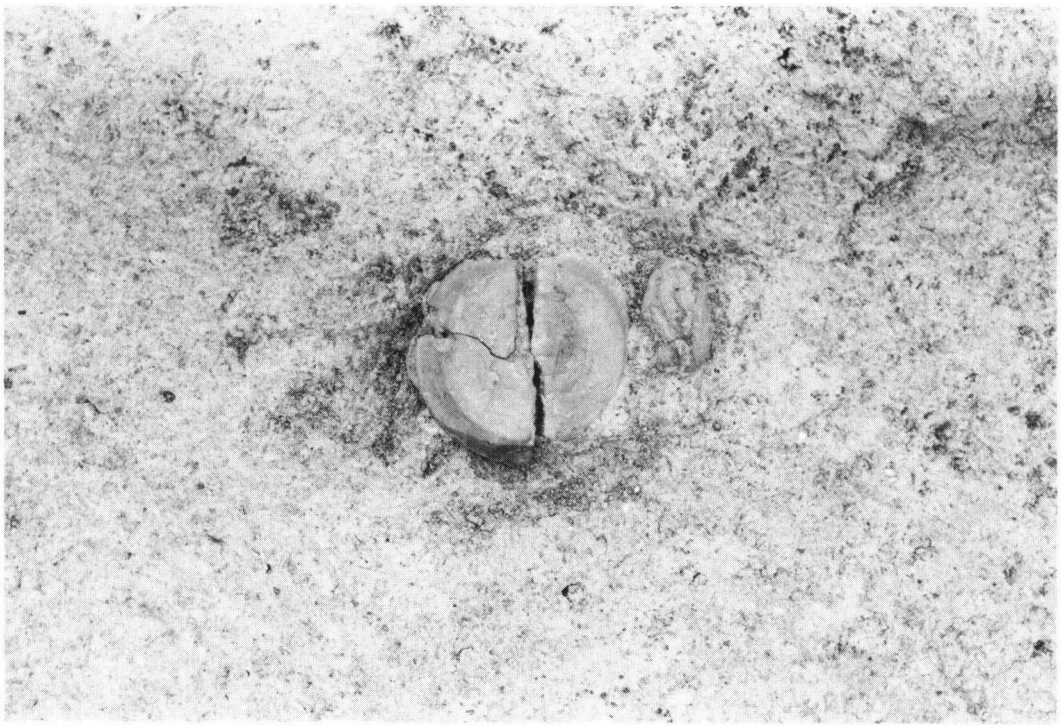
(6) 亀井明徳「九州出土の宋・元代陶磁器の分析―大宰府出土品を中心として―」『考古学雑誌』第58巻 第4号　19
岡内三眞「高知出土の輸入陶磁器」『高知の研究』第1巻　地質・考古篇　1983．3
太宰府市教育委員会「大宰府条坊跡Ⅱ」『太宰府市の文化財』第7集　1983．3

(7) 米倉二郎「国の昇格と国府の変容」『史林』66巻1号　1983．1

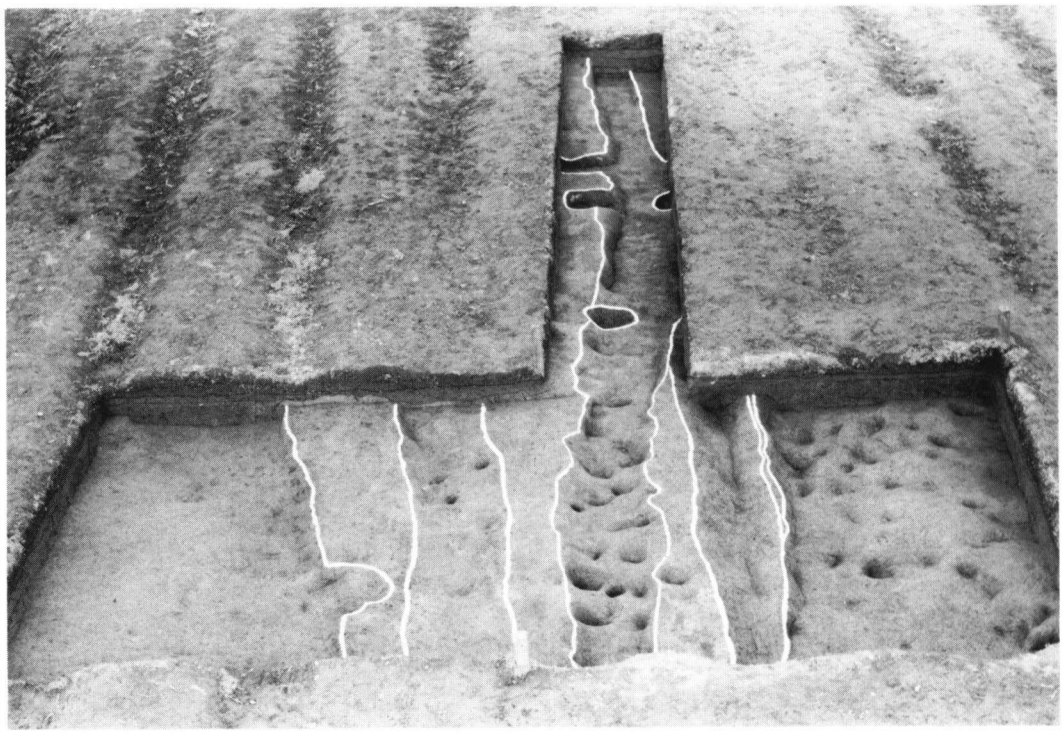
図　　版

阿波国府跡調査地点　　航空写真

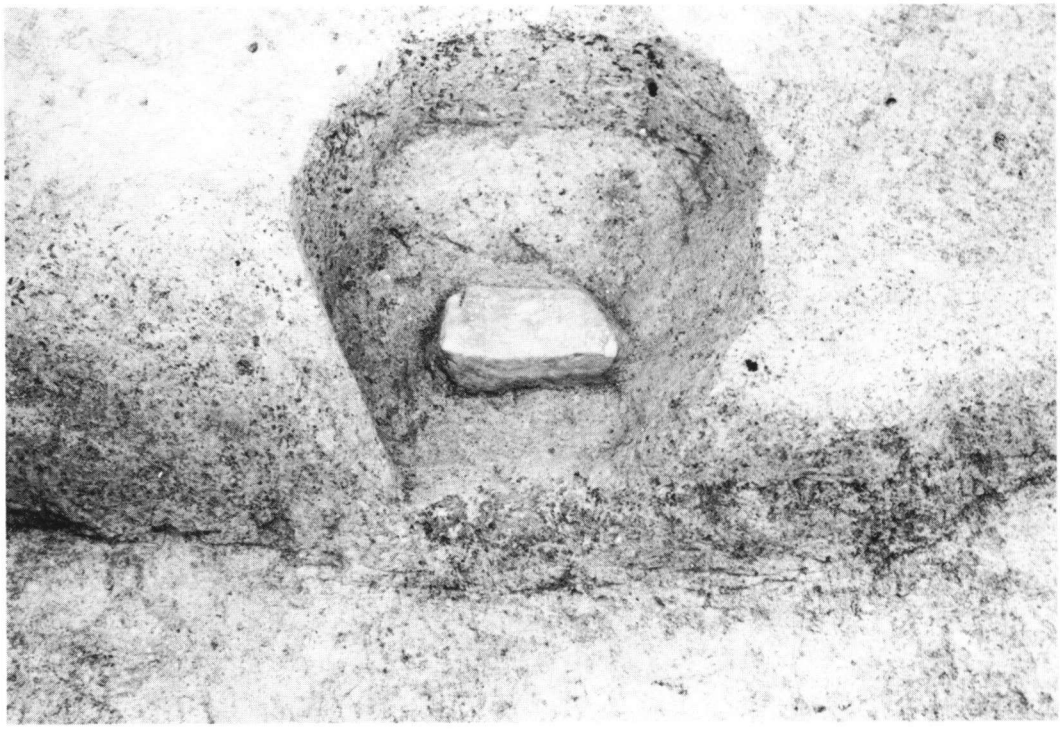
GⅢ－２地区　SD－14溝　　南より



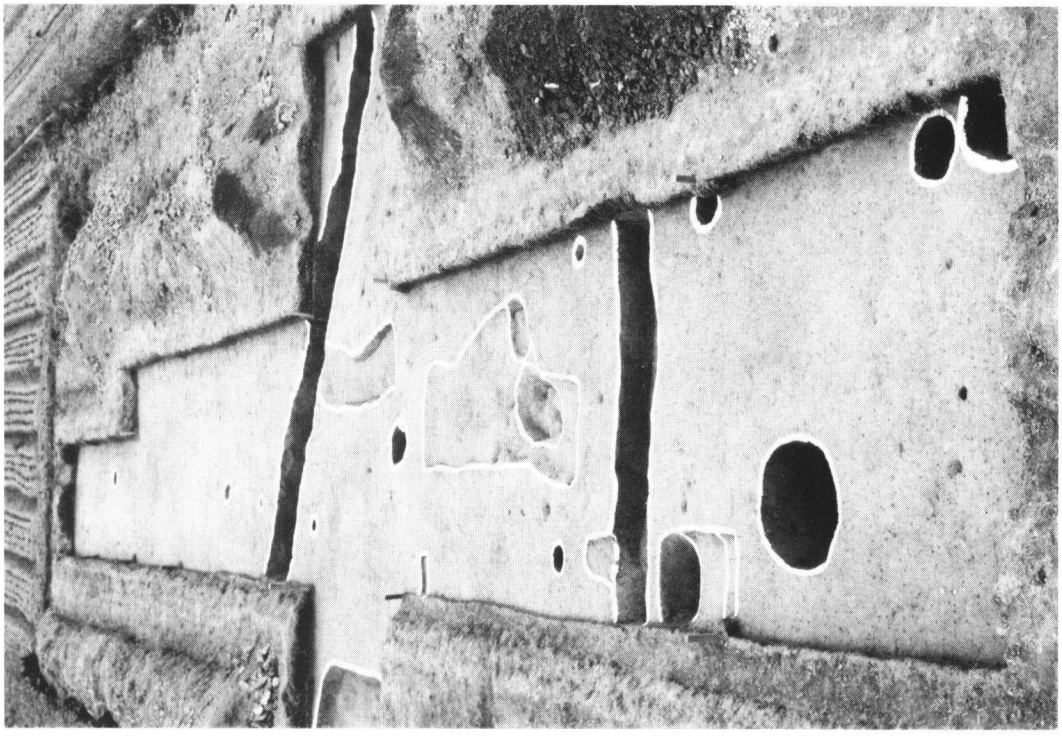
GⅢ－２地区　SD－14溝　遺物出土状態



GⅢ－2 地区 検出遺構　　西より

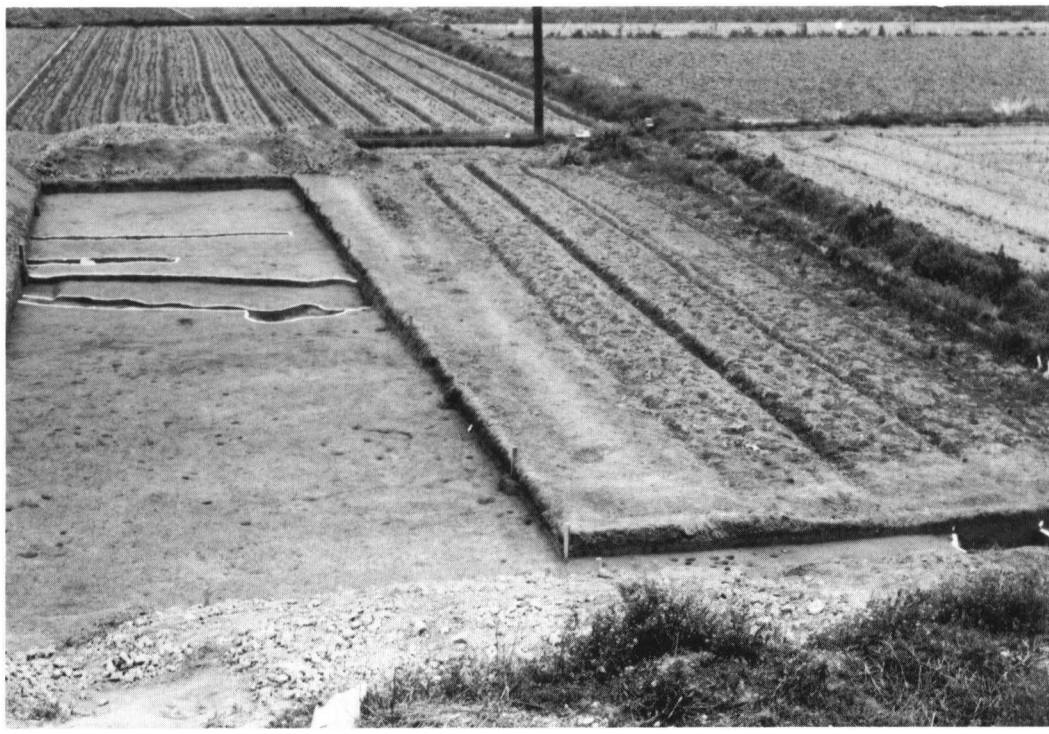


GⅢ－2 地区 軒平瓦出土状態



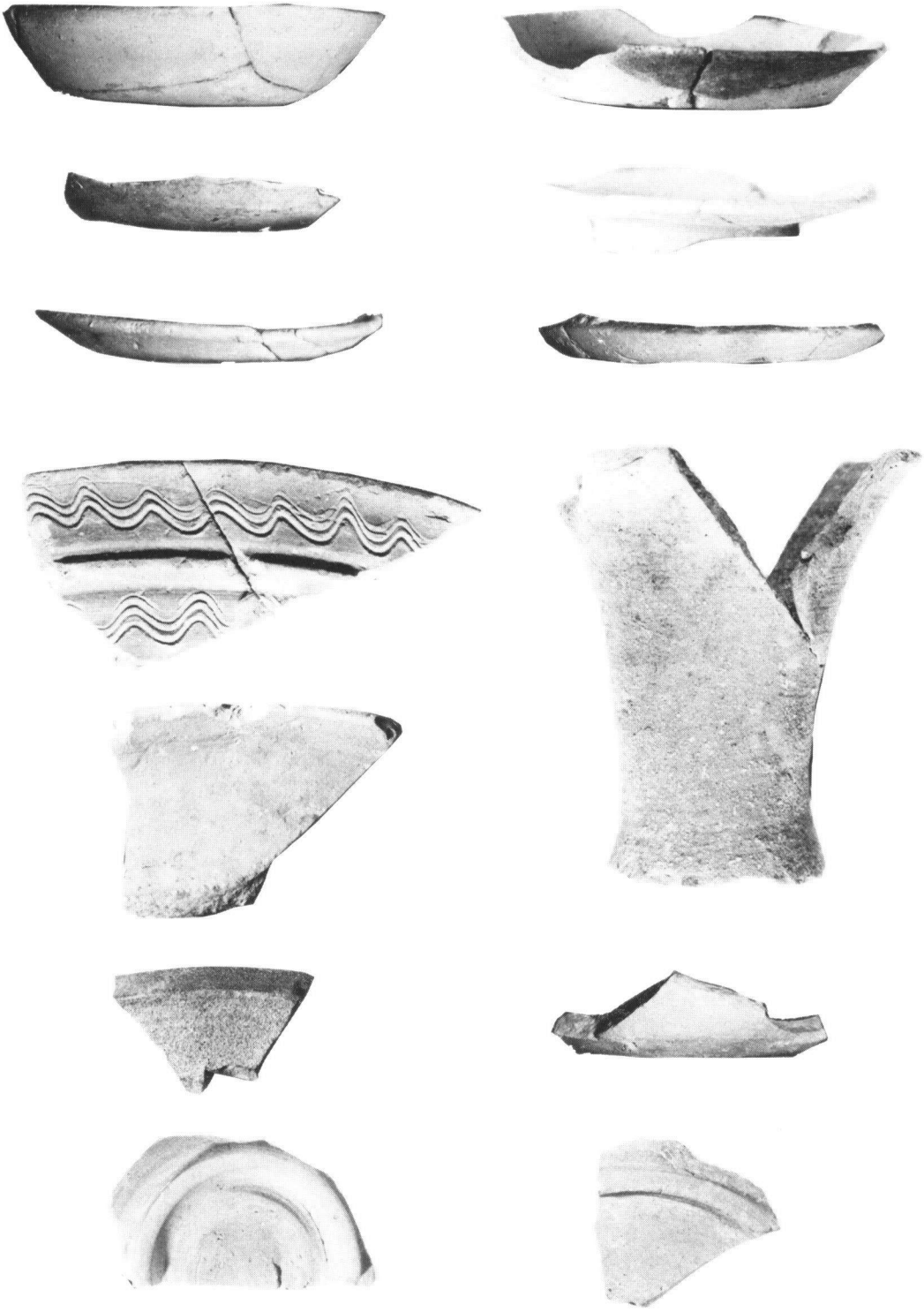
GⅢ－4地区 検出遺構　　西より

GⅢ－4地区 SK－27 土坑遺物出土状態



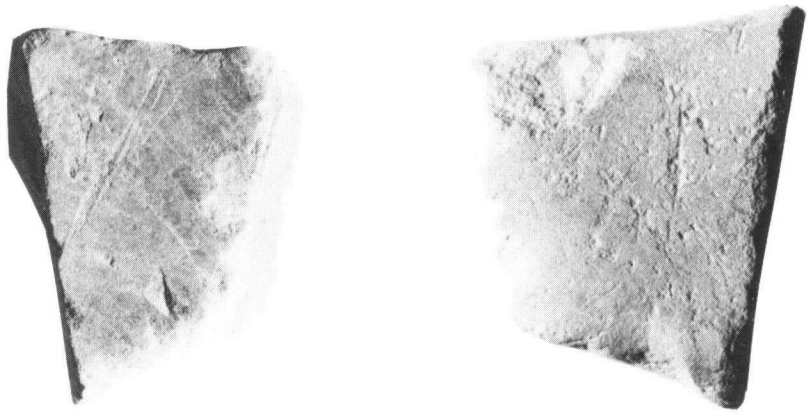
GⅢ－4 地区　検出遺構　　西より

HI 地区 検出遺構

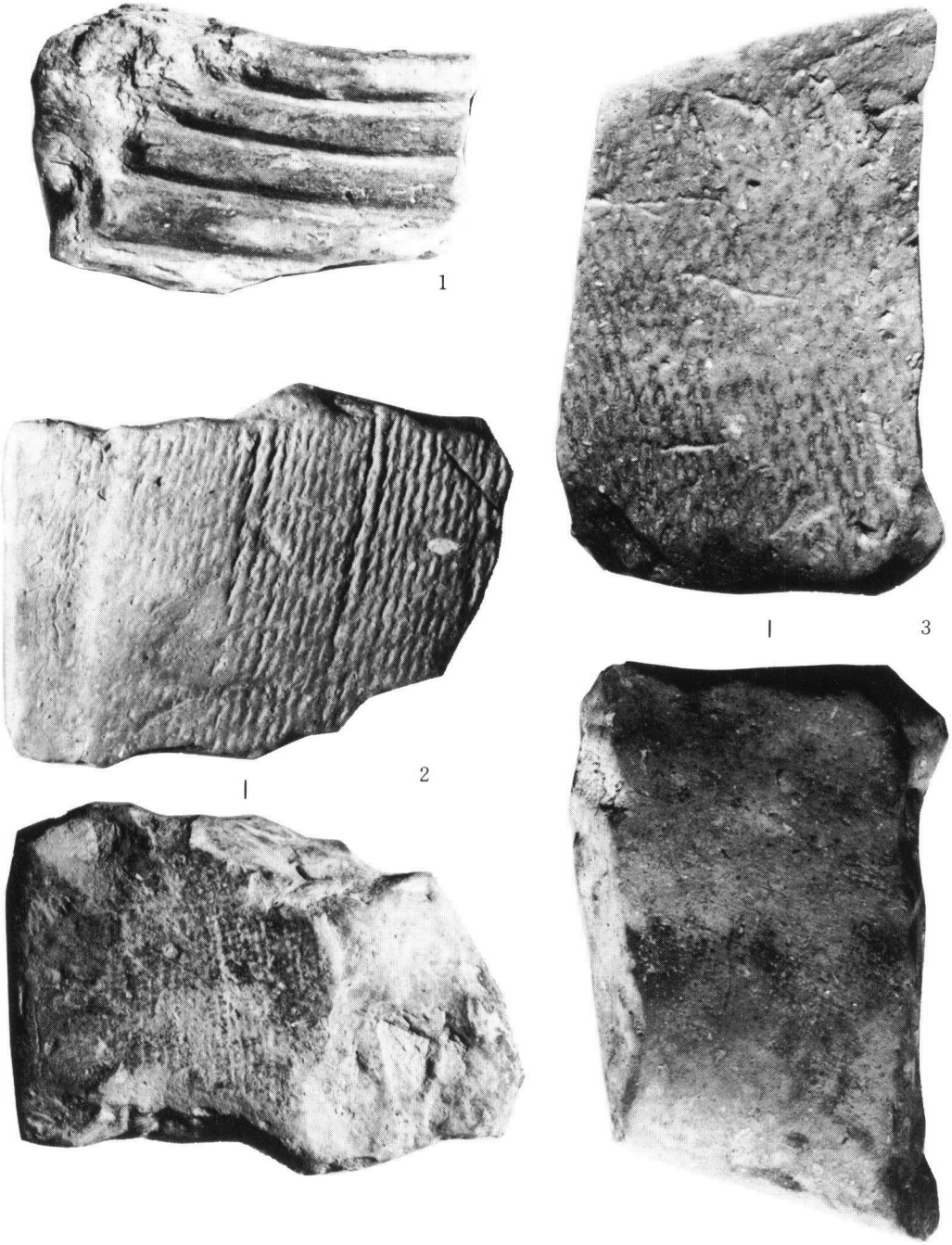


出土土師器・須恵器

出土土錘



出土砥石



出土軒平瓦・平瓦

徳島市埋蔵文化財調査報告書第16集

阿波国府跡第５次調査概報

— 1986年度 —

昭和62年３月31日

編　集　徳島市教育委員会社会教育課

発　行　徳島市教育委員会

印刷グランド印刷